

---

# 追憶の潮騒

終  
焉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

追憶の潮騒

### 【Nコード】

N66610

### 【作者名】

鸞

### 【あらすじ】

「見える？ほら、あのグランドの端。そうそう！あの小さな犬」  
こんな不思議な会話から同じクラスの慶と親友になった。

あまり好きじゃなかった小学生生活をすごした高校生・純ノ介。

慶と出会いで過去の不安から脱却できるとおもったが・・・

そんな楽しい高校生活でおこったある事件。

「同性愛」に悩む少年。

作者の体験した少年時代をまとめました。

## **（前書き）**

この作品には同性愛・自殺・いじめなどの表現が含まれます。

言えずに過ぎ去ってしまった日々がある・・・  
後悔を流してしまった日々がある・・・  
不意に悲しくなるのはなぜだろう・・・  
満足できなかった人生のせいだろうか・・・  
悲しみに耐え、苦しむことで何が生まれようか  
流れていく瞬間は戻らない。  
ただただ、生きていくのみ・・・

君に聞いたよね。

「目の前に赤と白の薔薇が2本並んでいるとしよう。  
君ならどちらが欲しいかい？」

君はやはり、どちらでもいいさ。おんなじバラなんだから・・・と、  
そう答えた。

あの日、そのことを問うた少年も、同じことを感じていた。  
本質は同じ。ただ少しだけ『色』が違っただけだと。

\* 朝 \*

目覚まし時計よりも、母の朝ごはんの準備の音よりも、  
すずめのさえずりよりも、朝刊の運ばれる自転車の音よりも  
そんな朝が始まる、何よりも早くに少年は目覚めていた。  
揺れるカーテンの隙間からは  
まもなく朝を迎えようかというあけぼのの光が  
花の香りとともに差し込んでいる  
もうすぐ朝なんだって胸を高鳴らすに足りる

ちよつと寒い。

少年は上着を羽織り、カーテンに手をかけた。

部屋には朝の冷たい風がしめている

桜の香り、若芽の香り、潮の香り

部屋があげばのの時と交わった

寒さだろうか？緊張？不安？期待？

少年は軽く身震いをした。そして大きく伸びをした。

トントントントン　チリンチリン　チュンチュン

止まっていた少年の贅沢な時間が流れはじめた

そう。今日は高校の入学式の朝。

小学生時代の混沌とした暮らしに別れを告げれるんだと少年は安堵に似た気持ちだった。

大きくなることへの不安、そしてここからの生活への期待。

そんな眩い朝に、少年は新たな一步を踏み出した。

4月。

厳かな入学式が終わり、春の初めの爽やかな風を浴びながら

少年こと純ノ介は、高校最初のホームルームを待っていた。

純ノ介の席はグランドの見える窓際の後ろの方だった。

新しい教室で　前も後ろも右となりも初めて見る顔ぶれ

純ノ介は思い返していた・・・

『腐った水』みたいな小学時代。何もかもが嫌になったあの頃。

新しい環境は純ノ介に必要な以上に期待感を持たせていた。

そんな時だった。

名前も知らない右となりの『あの人』が突然、純ノ介の意識下に独特な図々しさで入り込んできた。

『あの人』は純ノ介の左。陽を燦々に浴びたグランドを大きく指差

した・・・

そして純ノ介を手招きした。何度も何度も。

「？ん？ なに？？」

答える純ノ介に、周りに聞こえないくらいの小声で

「見える？ ほら、あのグランドの端。そうそう！ あの小さな犬」  
微かに豆粒くらいにしか見えない犬。

「あの犬がどうかした？」

「あの犬がオスだったら、俺が帰りにラーメン奢ってやるよ！ メス  
だったら奢って！」

初対面。

しかも初めての会話がそんななんて、純ノ介は可笑しくなった。  
二人は大きな声でわらって、その提案「賭けをのんだ。ワクワクし  
ていた。」

「いないよ！ もうどこかに行ったんだって」

「おいおい純ノ介、探さないと俺の昼飯がなくなっちまうだろ」

「慶が勝ったって決まってるだろー（笑）」

そして2人はラーメン屋で仲良く昼飯を済ませた。もちろん割り勘  
で。

純ノ介と慶は毎日つるんでいた。

日に日に仲良くなった。

昼休みも昼ご飯も、部活も放課後も

純ノ介と慶はいつも一緒だった

純ノ介のいるところは慶がいる。慶がいるところには必ず純ノ介が  
いる。

そんな仲良しになっていました。

ただ、純ノ介には不安がありました。

『腐った水』のようだった小学時代に感じた不安  
・・・仲良くなった人との別れの不安。

純ノ介が小学2年生の頃。

直哉という同じクラスの親友がいた。

毎日毎日一緒に遊んでいた。雨の日も風の日も・・・

「こんな大雨の日に、傘もささないで遊んでるなんて！！何考えてるの。あなたたちは！！」

直哉の母親から浴びせられた罵声は、

純ノ介には【母親】という仮面を被った【一人の女】への嫌悪に変わった。

風邪を引かないようにと大人としての優しさから行われた好意が嫌悪としか見えなかった。

そんな直哉は突然何も言わずに学校を去った。

家の都合で転校したと聞かされたのは、それからしばらくしてからだった。

寂しさと、悲しさで、小学2年生の純ノ介の心には大きな大きな穴があいた。

周りの友達と遊んでいても、何か物足りないような気持ちだった。人生で初めて出会った親友だったから。

それから半年くらいが過ぎた春。3年生になった純ノ介は裕幸に出会った。

裕幸は両親を事故で亡くし、歳の離れた兄と2人で暮らしていた。

直哉との別れで寂しかった純ノ介は、水を得た魚のように生き生きしていた

裕幸の秘密を聞き、純ノ介は秘密を打ち明けた。

2人だけのサインも作ったし、夢を語り合った。

裕幸の兄は夜仕事をして、昼間は大学に通っていたので

よく2人は裕幸の家に泊まった。

「ねえ純ちゃん。大人になったらさ大きな船作って、2人だけの国つくろうよ！」

「2人だけの国？つくれるかな。」

「純ちゃんと2人だけで暮らそう！」

両親を亡くし、兄も忙しい裕幸は、きつと純ノ介よりもっと寂しかったんだろう……

それからの2人は忙しかった。

毎日毎日、船の絵を描き、島の絵を描き。

あんなにしたい！こんなにしたい！

夢はどんどんふくらんでいった。

2人だけの国計画……。

その夢を追いかける内、純ノ介と裕幸は周りの同級生から離れ、2人きりになっていた。

それでも2人は楽しかった。

いつか叶うであろう夢のために一生懸命だった。

「純ちゃん。この絵僕にもらえないかな？僕が大事に預かる」

裕幸は、これまでの2人だけの国計画書を預けて欲しいって言った。

「どうして？どうして僕が持ってたダメ？」

「純ちゃんのお母さん、捨てようとするって言ってたでしょ？だから隠さない！」

たしかに夢ばかり語らないで勉強や読書をしろ！と母親に言われていた。

母親から毎日のように怒られていた。

【親】といった【人間】から向けられた教育といった好意が、2人には嫌悪に代わっていた。



純ノ介と裕幸は空き箱のなかへ大事な計画書を入れた。  
そしてそれを、裕幸に渡した。

帰り道。後ろを歩いてくる裕幸が言った。

「純ちゃん、きつと実現しようね。」

純ノ介は振り返り、もちろんだよ！という眼差しで裕幸を見た。  
泣いていた。

大粒の涙が裕幸から流れていた。

夕日を背後に二人は肩を組んで歩いて、それぞれの家に帰った。

その夜。けたたましいサイレンの音で目が覚めた。夜の11時頃。

「どっか火事か・・・」

うるさいサイレンの音を消すように布団をかぶったとき・・・

「純ノ介・・・！！大変よ！！裕幸君の家が火事だって！」

母の叫ぶような声だった！

純ノ介は理解できなかった

母に連れられて裕幸の家に着いた時には、真っ赤な火の海に包まれていた。

そこには裕幸も裕幸の兄の姿もなかった。

純ノ介は呆然とたたずんでいた。

数日後、裕幸たちが夜逃げをしたことを知った。

その火事が裕幸兄弟によって起こされたということも。

純ノ介はまたしても親友を失ってしまった。

直哉、裕幸という2人の親友との別れで、純ノ介の性格は大きく変わった。

小さい頃から社交的でやんちゃだった純ノ介。

塞ぎ込み、友達と遊ぶ事も避けるようになっていた。

周りの同級生からは

あいつ暗い！ 友達付き合い悪い！ 面白くない！  
そんな風に映っていとのだろう。  
幼い同級生には、虐めるためのいい存在になっていった。

シカト。上靴を隠される。教科書に落書き。陰口。  
幼い純ノ介にはどうしたらいいかわからなかった。

純ノ介は【死】を考えていた。  
いや。【生きたくない】と考えていた。

## \* 死 \*

純ノ介の通う小学校で《ウサギのホームステイ》という飼育行事がありました。

学校で飼育しているウサギが産んだ仔ウサギを、休校の日に家で預かるという行事だ。

土曜日の下校時に仔ウサギを連れて帰り、月曜日に連れて行く。

簡単な行事でした。

ホームステイ先の家に同級生たちが集まり交代で世話をした。

3回目のホームステイが純ノ介の当番だった。

しかし、純ノ介の家に行こうという同級生はもちろんいなかった。

一人ぼっちで世話をする純ノ介。

月曜日の朝、仔ウサギの異変に気づいた。

飼育箱の中で 冷たく・・・硬く・・・

仔ウサギは死んでいました。

純ノ介は泣きながら学校に連れて行きました。

教室の席で泣きながら、大事に飼育箱を抱きしめていました。

「おい。おまえウサギ死んでるんじゃないか？」

「おまえが殺したんだ」

「なんで死なせるんだよ!!!」

同級生たちは口々に罵倒した。

罵倒だけではなかった。

大泣きをしているもの。なだめるもの。

教室は子供たちの騒ぎ声で騒然としていた。

純ノ介は、ただただ飼育箱を抱きしめたまま座っていた。

「はい。こら！静かにしなさい!!」

教室に入ってきた女先生は、純ノ介の異変に気づき近寄ってきた。そして、だまって飼育箱を受け取った。

「先生！こいつがウサギを殺したんです！」

誰ともなく言った。

先生は飼育箱を抱きしめたまま朝のホームルームを淡々と行った。

仔ウサギの【死】がもたらした動揺は計り知れないものでした。

【生】あるものの【死】

若い少年たちは、悲しい現実に取り乱していました。

1時間目の理科。

先生は教科書を開くことなく、校庭へと促しました。

校庭の端っこ。

昼休みなら歓声が響く校庭・・・

静かな校庭・・・

死んだ仔ウサギを飼育箱から出し、ハンカチに優しく包み、胸に抱きしめながら先生は言った。

「みなさんは、お父さんやお母さんから生まれました。もちろん先生も。」

みんなは体育のリレーを知っているよね？  
お友達からお友達にバトンを渡すよね。そしてバトンを落とさない

ようにしっかりと握って走るでしょ。

あなたたちの【命】も、そのバトンと一緒になんです。

お父さんお母さんから【命】を渡されました。

そしてその【命】をみなさんの子供にわたさなきゃいけないの。子供にだけじゃないわ。生きているものすべてに命を渡すの。

このウサギさんもお父さんお母さんから【命】を渡されました。

かわいそうに亡くなったけど、このウサギさんの命を私たちは貰わなきゃいけないの。

そのために産まれて亡くなったんだから。」

なっていた子供たちは、先生を一生懸命に見つめ聞いていました。

「みなさんもお友達は大事だよね・・・」

ウサギさんもみんなの事が大事でした。みんなもウサギさんが大事だったよね。

ウサギさんは、お父さんやお母さん、そしてみんなと離れ離れになったから、

みんなが寂しくならないように、お月様に行ったの。

暗い夜にみんなが寂しくならないようにね。

だからウサギさんから渡された命を大切にしましょうね。」

そついい終わると、校庭に穴を掘り、ハンカチに包まれた仔ウサギを埋めました。

みんな泣きました。先生も。

1時間目が終わるまで、みんな校庭の端で泣いていました。

この出来事があってから、クラスに「いじめ」はなくなりました。純ノ介も死にたいと思わなくなりました。

純ノ介にはあまり好きな小学生時代だといえなかった。  
2人の親友との別れ。  
いじめの時期。

数年後

もちろん暑くなく、しかも寒くない。  
曇り空からところどころ陽が差し込む3月  
卒業式が静かに行われた。

\* キモチ \*

慶とであつた純ノ介。

【慶とは離れたくない・・・】

高校生の純ノ介の思いは次第に膨らんでいった。  
純ノ介の真新しいキモチの裏には、あの暗い古い気持ちちが張り付いて離れなかった。

この年の5月のゴールデンウィークは5日ほどあつた。  
純ノ介は丸々5日間、母の田舎へ行くことになった。

何気なく連休1日目・・・

慶、何やってるんだろう・・・

連休2日目・・・

慶、誰と遊んでるんだろう・・・

連休3日目・・・

学校行きたいなあ・・・

慶と話がしたいなあ・・・

苦しい連休4日目・・・

底知れない不安。言いようのない寂しさ。  
狂おしいくらいの悲しさ・・・

限界の連休5日目・・・

頭ん中、慶と逢いたいってキモチに満たされていた。

たった5日の連休。純ノ介にとっては長い長い時間だった。

今みたいに携帯電話があれば、何のこともない5日間だったんだろう。  
会えない・・・話せない・・・そんな寂しさは積もっていた

田舎から帰った純ノ介は、慶の家に向かった

慶の顔を見た途端、純ノ介は泣いた・・・

「どうしたの？純ノ介？ 何で泣くの？」

「・・・」

「そうかそうか（笑）俺に会えなくて寂しかったんだろ??」

意地悪げに笑う慶がなんだか素敵だった。

純ノ介には慶が必要なんだ・・・

慶がいなきゃ駄目なんだ・・・

ハッキリとわかった。

純ノ介には、生まれて初めて感じる胸の苦しみだった。

ゴールデンウィークも過ぎクラスもまとまっていた

純ノ介にとってクラスメイトがこんなに素敵なものなんだと、初めて感じた時期だ

『あゝ、ダリゝなあ。　なあ純ノ介、帰りにお好み焼きいかない！』

毎日の日課だ（笑）

何がダリイのかはわからないけど、慶の口癖だった。

『うん！行こう。行こう！』

またまたこれも、純ノ介の口癖だった。

『またお二人さんでお好み焼きかい。オレもつれてけ！』ちなみにこれも、竜二の口癖（笑）

こんな楽しい毎日が、至極当たり前のように過ぎていった。

純ノ介、慶、竜二、そして、大介、浩二。

五人は仲間だった。純ノ介にとって、初めてできた仲間。

慶と過ごす毎日、仲間と過ごす毎日

純ノ介にとって最高の時間だった。

『そうそう、夏休みにさ、俺んとこの別荘にみんなで行かね？』とお坊ちゃんである大介が言った。

『いいね！行く。行く。』と竜二。

『賛成！！つてか竜二は行くしか言わないんだから』（笑）』

大介は有名な建築会社の御曹司で資産家だった。

熊本にある別荘にみんなで遊びに行く計画が決まった。

『せっかくだからさ、一週間くらい行きたいなあ。親父もOK出してくれたから！』

『OK。じゃゝ一週間だ（笑）』慶も楽しそうだった。

それからというものの、隙さえあれば夏休み一週間旅行の計画をたてた。

あっと言う間に夏休みがやってきた。

ゴールデンウィークには苦しい経験をしたから…

今度は慶と離れ離れになりたくない……

そんなキモチで、毎日慶とつるんだ。

仲間とプールに行き、宿題をし、ボーリングに行き、山に登り  
毎日が遊びだった。

『純ノ介、夏祭りに行こうや!!』

『うん。みんな誘う?』慶に祭りに誘われてしまった。

『たまには二人で行くか(笑)』

『なんだよ。それ(笑)デートみたいじゃん!』

内心ドキドキしてた

初めて二人で遊ぶ……ような気がした。

『純と慶、二人で祭りに行くんだって……?』

浩二だった。賑やかだけど控えめな紳士みたいな奴。

『おう!浩二。デートだよ(笑)なに?なに?浩二も行きたいん?』

『いや……別に……僕……祭りとかあんまり好きじゃないし……』

浩二がいつもと何か違った。

気のせいかな?と思い過ごした。

夏休み一週間旅行まで10日前だった。

夏祭り。

純ノ介ははしゃいでいた。

『おい……!慶、金魚すくいやるよ!!』

『や……だよ……。俺、金魚嫌いだもん(笑)』

夜店一件一件。まるでカップルかのようにまわった。  
楽しい時間だった。



『おい、純！、慶！』

竜二と大介だった。

結局、仮想デートは終わって、四人で祭を楽しむ事になった。

夏休み一週間旅行まで5日の夜のことだった

\* 静寂 \*

夏休み一週間旅行まであと3日。

真夜中の電話のベルは、純ノ介の家の寝静まった静けさをうちやぶった。

『もしもし。……え、……はい……！で？……。』

深刻そうに電話で話す母の声は、純ノ介を起こすくらにに大きくなっていた。

『わかりました……。すぐに伺います……。何かお力添えに慣れれば……』

母の声に、何か深刻な事が起こってる事は察しがついた。

顔面蒼白な母は、純ノ介を手招きして、座るように促した。

あきらかに動揺しているようだった……

大きいため息をつき、目をつむり、そして目を開けた。

その目は潤んでいた。

泣いて……いた……。

『純ノ介 落ち着いてきくのよ。今、浩二くんのお母さんから電話があつて、浩二くんが……』

母の言葉を最後まできくまえに、純ノ介は家を飛び出した……

何が起きたかはわからなかったが。

純ノ介は浩二の家に行かねばならないと感じていた

そんなに遠くはない浩二の家はかなり遠くに感じた

純ノ介は息をきらせて浩二の家に着いた  
真つ暗闇をただひたすら走ってきたから、  
浩二の家の明かりが余計に眩しく見えた。

『誰もいないのかなあ？』 何度か呼び鈴を押したが反応はない。  
無性に心細くなった…

取り巻く暗闇に、純ノ介は身体全体が支配されるような不安を感じ  
た…

煌々と照れる浩二の家とは逆に、ただ無限に広がる暗闇。

純ノ介は漆黒の闇になだれ込んだ…

『おい。純ノ介！』

暗闇から微かな明かりが見えた。

声の主とともに、小さな光りは純ノ介に近づいてきた。

『純ノ介、病院いくぞ！みんな病院に集まってるよ。』 慶だった。  
ハッと我に返った。

そうだ、浩二に何かが起きてるんだった！

純ノ介は返事するよりも先に大きくうなづいた。

慶のチャリに二ケツをして、暗闇を疾走した。

病院にはさすがにひとけはなかった。

午前1時…

純ノ介と慶は静かに病院に入った。

待ち合い室前に竜二がいた。

『浩二…どんなだ？』

慶はぶつきらばうに聞いた。

竜二は一筋の涙を流し、首を左右にふつた…

純ノ介には今起きている事態が飲み込めないでいた。

竜二は純ノ介と慶を集中治療室へ促した。

暗闇の病院はこんなに淋しいもんなんだ…

三人の足音だけが響いていた。  
遠くに女性の嗚咽が聞こえた…

純ノ介と慶そして竜二が集中治療室に着いた時。

浩二の息は絶えた……

15年に幕を退いた…

浩二の母はなだれ込んだ…

慶は浩二のまだ暖かい手を握りしめた…

程なく、大介や先生が集まってきた。

浩二の体は浩二の家族によって丁寧にかつ厳かに扱われた。

純ノ介、慶、竜二、大介の四人は、真夏の夜、病院の待ち合い室に  
たむろしていた。

泣きもせず、話もせず。

互いに浩二との思い出を呼び起こしていた。

待ち合い室の時計が朝の5時を知らせた。

病院は何事もないように、新しい朝を刻み始めた。

『浩二、マンションから飛び降りたんだと…』

大介が口を開いた…

『うん…何悩んでたんだろ？』

竜二が続いた。

『馬鹿だよ。あいつ…。何で俺らに相談しなかったんだよ…。』  
慶は泣いていた。

『みんな、まだいたの。お腹空いたでしょ？おばさん家に帰るから  
一緒においで。ご飯たべよう』

浩二の母は泣き腫らした目で、気丈に話し掛けた。

純ノ介たちは頷きしがつた。

数時間前には、暗闇で不安だった浩二の家。

昨夜のまま、家の明かりは煌々とついていた。  
ただ日の出の明かりに負け、昨夜の明るさはなくなっていた。

「浩二、飛び降りたの…。私が気が付いた時には、向かいのマンションの屋上から飛び降りてたわ…。」

涙の涸れた目からは、もう涙は出なかった。

浩二の母はまったく思い当たることはない…。と。

純ノ介たちも同じだった…

浩二が何に悩み命を絶ったのか？

まったくわからなかった。

浩二の母はご飯とみそ汁を作ってくれた。

五人分……。

誰も手をつけない浩二の朝食も。

浩二の家を後にしたのは、朝の7時を過ぎていた。  
ぼーっとしていた。

何が起きたのか…

昨夜の事は夢ではないのか……

暫くしたら、いつもの浩二の笑い声が聞けるんじゃないか？

純ノ介は混乱していた。

きつとみんなそうだと思う。

部屋につき、気を失ったように眠りについた……

部屋の扉が閉められる音で目が覚めた。

部屋のテーブルに置かれた手紙が目についた…

純ノ介は直ぐさま手紙を手についた。

宛名はない……

ただ明らかに、浩二の筆跡に思えた……

純ノ介は母に聞いた。

たった今、郵便配達で届いたと……………

\* 宛名のない手紙 \*

前略…純ノ介へ

たった一人で暗闇に放り出され  
微かな光さえ 遮られ 孤独をまた生んだ  
あの日、あの海岸で。  
大きな海の潮の騒めきは  
僕の心をより締め付け 苦しめた  
純ノ介ならば必ずわかつてくれると思い  
手紙に想いを託しました

僕はずっとずっと一人でした

【孤独】でした

小学五年の時、慶に出会いました…  
毎日泣いてばかりいた弱虫な僕を  
父も母も友達も先生もみんな  
「男なら泣くな！」と蔑みました。  
でも慶は違いました。

慶は「浩ちゃんの涙で海になるくらい泣いていいよ…！泣いたら悲しさは忘れるから…！」と。  
泣き虫な僕の唯一の理解者でした。  
慶といったら、自然と泣かなくなりました。

ハッキリ言うね。

慶に恋をしていたと思う。

高校に上がり、慶の周りには純ノ介や竜二、大介がいて、

僕だけの慶じゃなくなりました…

慶を独り占めしたい…

慶に振り向いてほしい…

毎日がそんな葛藤でした。

慶を毎日見つめるうちに、慶に、いや男に恋愛感情をもっている僕は変態なんじゃないかって想いはじめた…

あの海岸の事覚える？あの海岸で僕は

みんなより先に分かれを告げようって決心した…

純ノ介！！純ノ介はすっげーいい奴だ！

でも僕とおんなじで弱虫だ…

慶なら弱虫な純ノ介を守ってくれるよ。

安心しなよ。

最後に… この手紙、純ノ介の心にしまってくれ…

今から僕は… 今までありがとう

純ノ介は何度も手紙を読み返した…

【死】の意味が、痛いほど伝わった…

浩二の悲しみを、純ノ介は充分すぎるほど理解できた。

浩二が死を決意した海岸での出来事…

純ノ介は思い出していた…

夏休みにはいった拓海たちは、毎日のように連れだって遊んでいた。  
ある日、あれは夏祭りまであと数日のある日…

『暑いな。こんなあつくつちや溶けちゃうぜ。』

大介は汗を拭きながら言った

『アホくさい（笑）じゃあ！暑かったら涼むしかないっしょ！！』

慶は大介の頭を小突いた。

『海行かね？泳ぎ！！』

『賛成！！』

竜二の提案に慶は真っ先に賛成した。

『賛成だけど、水着ないやん（笑）』

まだ汗を拭きながら大介言った

『いらねーって（笑）パンツ穿いてりやOKっしょ』

ガキのノリ慶は言って、みんなで海岸へ行った。

慶、竜二、大介はトランクス一枚で海の中ではしゃいでいた。

『純ノ介。お前は泳ぎ禁止な（笑）風邪気味はそっから見てる』

（笑）

慶が手を振りながら浜辺の純ノ介に言った

『浩二は早く来いよ！』

海の中から涼しそうな顔の大介が叫んでいる

純ノ介と浩二は砂浜で座っていた。

純ノ介は風邪気味で・・・

『…僕はいいよ』

浩二は何故か泳ぎたがらなかった。

ハシヤギ回る三人。

大介が浩二の側まで来た。

『浩二、来いよ！早く！！』

水に濡れてピッタリ張り付いたトランクス

大人になりかけの艶やかな高校生の姿。

程なく三人は、浩二を脱がすことを楽しんでいる様子だった…

大介に抑え付けられた浩二…

慶と竜二は、浩二の服を一気に脱がし真っ裸にした…

浩二の下半身は大きくなっていた…

『ありえんやろ』（笑）浩二、元気やなあ』（笑）  
はしゃぐ大介。

『あれあれ（笑）俺らの裸に興奮した〜？』  
いたずらっ子みたいな顔で竜二が言う。

ふざけは最高潮に達していた。

『浩二、男みて興奮かよ』（笑）キモいな〜』  
慶にとって、いつものおふざけにすぎなかった…

浩二の目から大粒の涙が流れた……

三人から服を奪い帰して、浩二は海岸を走り去った…

浩二が去った海に四人は残された。

『浩二ったら、変な奴だなあ〜』

そついう大介に竜二は心配そうに

『何かあつたんじゃね〜の？』

程なく四人は家路についた。

じゃーまた明日な！

と声を掛け合い別れた。

純ノ介が家の近くまできた時、家の前に座っている誰かに目がいった。

『…浩二？…』

それは浩二だった。

抜け殻みたくなった浩二だった。

浩二は涙いっぱいの顔でこちらを見た。

『大丈夫？浩二…』



『……………』

浩二は無言のまま首を左右に振った。

『気分転換に行こうか？』

浩二は純ノ介の数歩後をうなだれ続いた。

純ノ介は海岸に向かった。

太陽は西に傾きかけていた。

二人は海岸が見渡せる石垣に座っていた。

昼間の海岸とは違って、潮間だった。

潮間の干潟には沢山の蟹が干潟に作った穴から出入りしていた。

中には鋏を掲げて、潮を招いているような蟹もいる。

夕日は水平面に差し掛かろうとしている。

鳥が飛び、蟹はうごめき、干潟の潮溜りには魚が泳いでいる。

なんて贅沢な景色なんだ…

絵画の様な風景。

静寂を破ったのは浩二だった。

『…なあ。純ノ介。僕、みんなに嫌われたよなあ…』

いつになく真剣な眼差しだった。

『そんな事ないよ。みんな仲間だよ。』

『いや。だって、みんな変態だって思ったはずだよ…。純ノ介だっ

てそうだと…？』

『浩二…！考え過ぎだって…！』

『……………』

浩二は驚いた顔をしていた。

『もし浩二が男を見て興奮したって、別にいいじゃん。浩二は浩二だよ！』

浩二の目から大粒の涙が溢れだした。

浩二は立ち上がって伸びをした。

『純ノ介！君は強いね…』

『強くないさ……』

『．．．なあ、純ノ介。裕幸って覚えてるか？』

『……裕幸……。覚えてるさ！……え？浩二、裕幸を知ってるの？』

『うん。小学生の時、裕幸とは剣道の道場が一緒だった。』

裕幸。純ノ介が小学生の時親友だった人。

両親がいなく歳の離れた兄と暮らしていたあの親友。

『裕幸、いつもお前の事話してたよ。二人で大きな船作って旅に出るんだ！とか』

二人だけの国作るんだ！とか。羨ましかった…。

純ノ介ってどんな奴なんだろう？ってずっと思ってたよ。』

浩二は裕幸の話しを続けた。

『裕幸ん家が火事になった前の日、純ノ介を頼んだって言われちゃってさあ…。』

見たこともない奴頼まれても…って苦笑いしたよ（笑）

裕幸と兄貴、それから一年して、自殺した………』

『自殺って……どうして？』

純ノ介は驚いた。

『親の残した借金、若い兄貴に賄えなかった…』

亡くなる前に、拓海の事気にしてたよ…』

最後の最後まで、裕幸は純ノ介の仲間だったんだな！』

『…浩二…。でもなんで俺がその純ノ介だって解ったの？』

『裕幸から、亡くなる前に二人で写った写真が送られてきたんだよ。入学式の日、クラスの名簿と顔を見て、あっこいつ純ノ介だ！ってな』

あと少しで太陽は水平面に完全に沈もうとしていた。

話し込んでいる内に、辺りは薄暗くなっていた。

夏特有の暮れの涼しい潮風が二人を吹き付け始めた。

明かりの着いた漁船が、沖合いを行き交い始めた。

夜が訪れ始めた。

『純ノ介。守ってやれなくてごめんな。』

『何言ってるの？なんかお別れみたいな事言ってる！』

『昼間：この海岸で：僕が男が：好きな奴だって：みんな蔑んだ：！でも純ノ介は違った：。』

やっぱり裕幸の言うように、純ノ介はいいやつだったよ……』

『……浩二……』

『さっ！純ノ介。送るよ！』

浩二は純ノ介を家まで送り届けると、握手をした。

『純ノ介！ありがとう！』

言い終えた浩二の暖かい掌は強く握りしめられた。

そして泣いている事を見られたくないかのように、足早に走り去った。

浩二からの手紙を何度も何度も読み返した……

涙が枯れるまで泣いた……

浩二が夜の海岸での別れ際に固く握りしめた掌の温もりが、

ついさっきのように感じられたのに……

泣いても泣いても……

拭い去れない悲しみ……

泣けば泣くだけ……

膨らんでいく悲しみ……

どれだけの時間が過ぎたのだろうか……

時間の感覚さえ失われているかのようだった……

男が好きだからって……なんで……なんで……

死を選ばなきゃいけないんだ……

誰に迷惑かけたんだよ……

生きる価値ないのかよ……

生きちゃダメなのかよ……

\* 闇 \*

純ノ介は深い深い海の底に立たされていた……  
誰もいない……

真っ暗で……

息苦しい……

上を見ても……

横を見ても……

何もない……

程なく上から明かりが射した……

真っ暗な孤独な深海に射す、一筋の優しい光。

優しい光は眩しくて……眩しくて……

目を反らした……

光は消えた……また暗闇が支配した

苦しい……苦しい……

夢だった。

息苦しさで目が覚めた……

夏休み旅行に行くはずだった朝、純ノ介と慶は浩二の家にいた。  
今日旅立つ浩二を見送るために……

『……浩二、何があつたんだろ？』

『うん………解らない………』

純ノ介は慶に嘘を言った…

浩二の自殺の理由は痛いほど解っているのに。

純ノ介と慶は葬儀屋のバスに乗せられ、火葬場に向かった。

道すがら動物園や図書館、自然公園……

みんなで楽しい時間を過ごした場所を通った。

でも、純ノ介に思い出されるのは、あの日のあの浩二の悲しい瞳だけだった……

とても青く澄んだ空だった。

雲一つない、真夏の青空だった。

煙突から立ち上る白い煙りは、真っ直ぐに、ただ真っ直ぐに青空を目指した。

何の迷いもなく、

なんの悔いもなく、

伸び伸びと青空を目指した。

『浩二… いったちやっとな…』

『…うん…』

純ノ介には『うん』と相槌を打つことで精一杯だった。

浩二との別れから三ヶ月が過ぎようとしていた……

季節は夏から秋に変わり、その秋も終わろうとしていた

慶と竜二、大介と三人で

あの夏の日に過ごした海岸にいた。

静かな海岸は、あの夏の喧騒が嘘みたいだった。

『あのさあ、噂聞いたんだけど、浩二、あいつ、ホモだったらしいぜ』

竜二がポツリと言った。

『マジかよ！誰に聞いたんだよ』

驚く大介に竜二が続けた。『みんな言ってるさ！』と  
純ノ介は黙っていた。

『……で、自殺したってわけ？』

慶が言った。

『みたいだぜ』知った顔で竜二が言う。

『なんか、有り得ないなあ』俯きながら慶が言う。

浩二に対するみんなの思い出が崩れ初めていた……

純ノ介は言葉を発せなくなっていた。

あまりのショックに……

『じゃーさ、浩二の奴、俺らに興奮してたんかな（笑）』

いつものいたずらっ子の顔で竜二が言った。

『えー！嫌やなあー（笑）』

慶と大介が同時に言った。

『浩二が……もし浩二が男が好きだったとしても……いいじゃんか！』

純ノ介は3人に背を向けてボソツと言った。

『純ノ介、お前とやりたいかと思ってたかもよ（笑）』

慶が笑いながら言った。

純ノ介の目から、大粒の涙が流れていた。

『……おい、純ノ介？どうした？』

『……………』

慶の問いに何も語れなかった……

慶や竜二や大介が、すごく遠くの人に感じた。

夕陽が海岸を照らしていた。

無言のまま四人は夕陽を見ていた…

純ノ介は海岸を歩きはじめた…

浜辺に、くつきりと足跡を残しながら…

あの夕陽の浜辺から、なんとなくみんなと疎遠になったような気がした。

絡まないわけじゃないし、遊ばないわけじゃない…

ただなんとなく、疎遠になったきがしていた。

クリスマスが訪れ、大晦日、正月、節分と…

当たり前だけど……

至極あたりまえに時間は流れていった……

ただ、慶たちが「ゲイ」に嫌悪を抱いている事実。相容れない気持ち…この事実は消え去る事がない。

よくよく解っていた。

数々の思い出が詰まった、純ノ介の高校1年。

あとわずかで、終わろうとしていた。

\* 朝日 \*

2月の夜は寒く、凍えるくらいの冷たい風がふいていた。

高校を一昨年卒業してバラバラになっていた。

純ノ介は専門学校卒業を控え。慶と大介は大学2年。竜二は食品会社の営業をしていた。

それぞれがそれぞれの道を歩いていた。

慶の提案で《浩二の誕生日にお参りに行こう》ってことになった  
あのことがあり、浩二がなくなって法事以外初めて家に行くことにな  
った。

前日の夜から数年ぶりに慶の家に4人で集まっていた。

他愛のないテレビを見ながら、お菓子食べながらダラダラと夜中の  
3時ごろ。

誰からともなく『朝日を見よう!』ということになった。

今年の元日が雨で初日の出をみれなかったから。という理由で。

『このまんま家にいたら寝ちまわね〜かな?外行こうか!』

慶の大胆な提案だった。

肌を刺す2月の夜。しかも海岸。

「さつむつ!寒すぎだよ・・・」

ぶるぶると大介が言う。大介は暑がりの寒がり。さすがお坊ちゃん  
だ。

「嫌ならあつたかいオウチにお帰りい〜大ちゃん(笑)」

相変わらず意地悪げなの顔で慶が笑う。

「ほんと、いくつになっても大介はお子ちゃまだな(笑)」

相変わらずのいたずらっ子顔の竜二が言う。

純ノ介は1年ぶりに見る3人を見て、ほほえましく思えた。

何年たつてもきつとみんなこのままなんだろうな・・・と

感傷に浸っていた。

「でもさあ、海岸で朝までいたら凍死すんぞ!」

「大介、大袈裟なんだよお(笑)慶も竜二もそんなに寒がってない  
んだし」

「そうだぜ!純ノ介の言う通りだよ」

慶は笑っていた。

「じゃあどうすんのさ!このまま帰っちゃう??」

竜二は困った顔で言う。



「なんやかんや言っても、あと2、3時間で朝日出るだろう？」

「慶の言う通りだよ。大介（笑）」

純ノ介は言った。

漆黒の海の彼方で潮待ちの船の明かりが遠くに小さく見える

海岸にはもう少しで満ちようとしている潮騒の音に満たされていた

誰もいなかった海岸… 真っ暗で… 静かだった海岸…

上を見ても… 横を見ても何も無い…

程なく海の彼方の空が白みだした

生まれたての朝日が美しい潮焼けを作り出した。

真っ暗だった孤独な海に射す、一筋の優しい光。

優しい光は眩しくて… 眩しくて……………

「きれいだね。」

純ノ介は朝日を見ながら言った

「寒くても待った甲斐があったよ」

大きく伸びをして大介が言った。

「この景色、あいつにも見せてやりたかったな・・・」

竜二の一言でみんなの中にあつた、浩二への軽蔑が消えたんじゃないか？  
いか？

浩二がつらかった苦しみを理解してくれたんじゃないか？

純ノ介はそう感じた。

高校時代この海岸であつた浩二の苦しみ。

あの夜、浩二が打ち明けてくれたこの海岸で沈んだ太陽が  
数年の時をかけ朝日となつて昇つていく

海に突き出たこの岬だからこんな贅沢な景色が見える。



僕の悲しい思い出  
僕の楽しい思い出

すべてはこの潮騒とともに  
追憶にふける

[illegible]

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6661o/>

---

追憶の潮騒

2010年11月12日04時32分発行